

*Galerie des modes et costumes français dessinés d'après nature*, gravés par les plus célèbres artistes en ce genre, et colorés avec le plus grand soin par Madame Le Beau.

Paris, Chez S<sup>rs</sup> Esnauts & Rapilly, [1778-1781]. 2vols. 203 plates (copper hand-col., mono.). 40×27cm. <K383. 135-G> 文献番号 3-57-②

Hiler p. 351      Colas 1169      Lipper. 1129

『ギャルリー・デ・モード；1778年から1787年までの写生によるフランス・モードと服装の図集』

フランス革命の10年ばかり前のこと、パリの二人の若い版画屋エスノー（Jacques Esnauts）とラピイ（Michel Rapilly）は彩色を施したモード版画集の発刊を思い立った。当時はまだフランスでも、独立したモード誌は刊行されておらず、わずかにロンドンで『ザ・レディズ・マガジン』があるだけで、それにもまだ彩色は施されていなかった。15世紀後半以来の伝統に培われた西洋の銅版印刷も、色刷りとなると話は全く別で、それは当然、手彩色によらざるを得なかった。事実、当時のファッション・プレートで彩色がなされていたとすれば、それは大抵買った人の好みによってなされたものであった。だからエスノーらの試みは、いかに大胆で野心的なものだったかが分かる。『ギャルリー・デ・モード』の初版は1778年、24枚程を単位として刊行されたが、決して定期刊行とはいえなかった。こうしてこの版画集は1787年をもって廃刊となるが、その間何枚で完結なのかは明らかでない。推定では450枚位とされ、フランスの図書館でもあちこちに分注しているのが実情である。

こうして、『ギャルリー・デ・モード』の元版は、すでに美術品の系列にはいって、生のままで今日の私たちの目に触れることは希有であるが、幸い本館には Collection d'habillements modernnes et galants（文献番号3-57）のタイトルのもとに元版の253枚（259図）も保存されている。

『ギャルリー・デ・モード』は、厳密にいうとモード誌ではないが、モード誌の先駆的な役割りを果たしたばかりでなく、ロココ終末期に当たるルイ16世時代を飾る繊細甘美な服飾芸術の極致を現す華麗な絵巻として、服飾史上でも重要な位置を占めているからである。

図版を手掛けた著名な作家には、デレ（Claude Louis Desrais）、ルクレール（Pierre Thomas Leclère）、ヴァートー（François Louis Joseph Watteau）、サン・トーバン（Augustin de Saint-Aubin）などの錚々たる画家や版画家たちがいて、ルボー夫人の手彩色はまたプレートの価値を高める極めて重要な伴奏ともなっている。

ロココの情趣を支配したものは、洗練された人間的な優雅さであり、それゆえロココの衣装は一つの芸術にまで高められた。その様式的基調は大別二つになる。一つは、ゆるやかなひだづけを特徴としたローブ・ヴォラント（いわゆるネグリジェ・スタイル）、他の一

つはパニエ（いわゆるフープ）である。そして、この主調はルイ 16 世の時代になっても失われてはいない。しかし、私たちはその終焉の姿をこの期の入念にして巨大な婦人の髪型の中に認めることができる。つまり、本書に描かれた婦人の姿態のすべてが、この髪風中心に展開され、あたかもロココの残照の輝きとなっている。ポロネーズ、シルカシエンヌといった一連のパスル・スタイルは到来する新時代の予告であり、ルダンゴトやア・ラングレーズなどと共に英国風の自然主義の反映なのであった。他方、フランス型ローブの伝統も強く盛装に残っていたことは、本書の図版によっても明らかである。（石山）



扉 絵